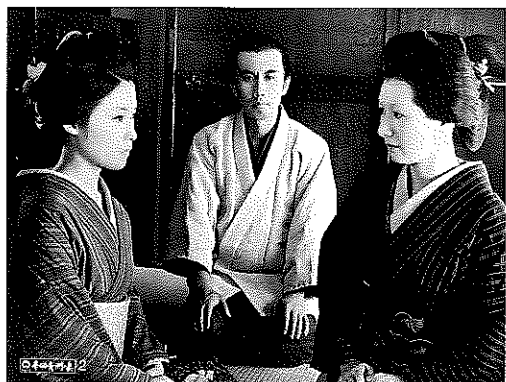


**華岡青洲の妻** [1967年 大映(京都)]



[スタッフ]	[出演者]
原作 有吉佐和子	華岡青洲 市川雷蔵
脚色 新藤兼人	加恵 若尾文子
監督 増村保造	お継 高峰秀子
企画 辻 久一	直道 伊藤雄之助
撮影 小林節雄	小陸 渡辺美佐子
照明 美間 博	加恵の乳母 浪花千栄子
録音 大角正夫	お勝 原知佐子
音楽 林 光	下村良庵 伊達三郎
美術 西岡善信	(白黒 シネマスコープ 99分)

**[解説]**  
 有吉佐和子の同名原作を、新藤兼人の脚本を得て増村保造が映画化した作品。日本初の麻酔薬の開発者として名高い、紀州の医師華岡青洲をめぐる母と妻の葛藤を中心に描いている。加恵は青洲の母お継に憧れて21歳で華岡家の嫁となった。京都で医学修行を積んでいた夫が帰国するのは3年後である。やがて、加恵をさしおいて、なにくれとなく夫の世話を焼く姑は加恵のなかでライバルとなっていく。嫁と姑のひそやかな対立をよそに、青洲はひたすら麻酔薬の研究に打ち込んでいった。動物実験の段階を終えて、人体を用い効果を試すべきときがきた。その時、自ら実験台になることを申し出たのは二人の女、母と妻であった。譲らない二人に、青洲は同じように薬を与えるのだったが…。増村保造はこの映画化に熱心で、企画会議で永田雅一社長に訴えて製作許可を得た。増村自身は、女の戦いを利用しつつ薬を完成させた華岡青洲に魅力を感じていたらしい。「キネマ旬報」ベストテン第5位。

**伊豆の踊子** [1963年 日活]



[スタッフ]	[出演者]
原作 川端康成	薫/少女 吉永小百合
脚色 三木克巳	川崎 高橋英樹
脚色 西河克己	栄吉 大坂志郎
脚色 西河克己	お芳 浪花千栄子
脚色 西河克己	お清 十朱幸代
脚色 西河克己	お咲 南田洋子
脚色 西河克己	人夫頭 郷 鉄治
脚色 西河克己	鳥屋 桂小金治
脚色 西河克己	紙屋 井上昭文
脚色 西河克己	学生 浜田光夫
脚色 西河克己	老教授 宇野重吉
脚色 西河克己	(カラーシネマスコープ 87分)

**[解説]**  
 川端康成による有名な同名小説の4度目の映画化である。日活では初めての試みで、当時同社の若手スターだった吉永小百合と高橋英樹が主演した。宇野重吉扮する大学教授の回想という形式を採っているのが特徴で、現在と過去をカラーと白黒で使い分け、現代の女性と回想中の踊子を吉永に二役で演じさせたことについて、西河克己監督はこれまでの『伊豆の踊子』と違った試みをやりたかった、と述べている。原作中の有名な台詞「いい人は、いい人ね。」を意図的にシナリオから削除したことにも、新しい「踊子」像を作ろうとした野心が表れているが、田中箱代出演による初の映画化(1933)でも、後の映画化と比較しても、全体としてはセンチメンタルな作品に仕上がっている、と言えるだろう。川端はこの作品のロケーション撮影を訪れているが、完成した作品について川端が各地で高い評価を公言したので、西河監督がかえって戸惑ったという逸話も残っている。

**稲妻** [1952年 大映(東京)]



[スタッフ]	[出演者]
原作 林芙美子	小森清子 高峰秀子
脚色 田中澄江	屋代光子 三浦光子
監督 成瀬巳喜男	国宗つぼみ 香川京子
撮影 峰 重義	清子の長姉 縫子 村田知英子
照明 安藤真之助	つぼみの兄 周三 根上 淳
録音 西井憲一	清子の母 おせい 浦辺粂子
音楽 斎藤一郎	田上りつ 中北千枝子
美術 仲美喜雄	杉山とめ 滝花久子
	縫子の夫 龍三 植村謙二郎
	清子の兄 嘉助 丸山 修
	(白黒スタンダード 87分)

**[解説]**  
 それぞれ父親の違う四人の子供たち。母はそれをそのまま受け入れて暮らしているが、末っ子の清子(高峰秀子)は姉や兄たちの身勝手な無気力な生き方に生理的な嫌悪を抱いている。山の手の世田谷で一人下宿生活を送っているのもそのためだ。次女の光子(三浦光子)が飼っている子猫のように、弱々しい生きものとして周りの世話になりたくないのだ。林芙美子の同名小説は1936年に発表されたもので、実母をモデルにしたものとも言われている。監督の成瀬巳喜男は、戦前の松竹時代から林芙美子に関心を抱いていたが、映画化の機会をもてないままであった。この作品は『めし』(1951)に続く林文学の映画化である。下町の庶民の姿をいたずらに劇化することなく、静かに見つめているところに特徴がある。田中澄江脚本。「キネマ旬報」ベストテン第2位。

**にごりえ** [1953年 新世紀映画社=文学座]



[スタッフ]	[出演者]
原作 樋口一葉	第一夜「十三夜」
脚色 水木洋子	斎藤もよ 田村秋子
// 井手俊郎	娘 原田せき 丹阿弥谷津子
脚本監修 久保田万太郎	父 主計 三津田健
監督 今井 正	俣夫高坂録之助 芥川比呂志
製作 伊藤武郎	第二話「大つごもり」
撮影 中尾駿一郎	みね 久我美子
照明 田畑正一	叔父安兵衛 中村伸郎
録音 安恵重遠	山村あや 長岡輝子
音楽 団伊玖磨	安兵衛の妻しん 荒木道子
美術 平川透徹	山村石之助 仲谷 昇
	第三話「にごりえ」
	お力 淡島千景
	源七の妻お初 杉村春子
	結城朝之助 山村 聡
	源七 宮口精二
	(白黒スタンダード 130分)

**[解説]**  
 1937年に創設された文学座が、戦後その全盛期を迎えるにあたって発案・製作された作品。夭折した明治の女流作家・樋口一葉の晩年の短編小説「十三夜」「大つごもり」「にごりえ」を原作に三話構成のオムニバス形式を採り、当時新鮮な現代劇で注目されていた今井正監督が、京都映画撮影所(旧松竹下賀茂撮影所)で完成させた。役者の緊張を強いる簡潔なセットの中で徹底したリハーサルが繰り返され、微妙な計算により作り出された明治の光と闇の中に、過酷な状況を生きざるをえない女たちの一瞬が捉えられている。この年、今井監督は大ヒット作「ひめゆりの塔」も演出しているが、「キネマ旬報」ベストテンでは『にごりえ』が第1位、『ひめゆりの塔』が第7位に選出されている。